

ISSN 1343-9537

植生情報 第26号

2022年6月

Vegetation Science News No.26

June 2022



植生学会

The Society of Vegetation Science

目 次

植生学会第 27 回大会のご案内	1
------------------	---

意見

高槻成紀：植物量と草食獣の密度の関係の説明について	4
---------------------------	---

各委員会から

2022 年度植生学会 学会賞, 奨励賞, 功労賞ならびに特別賞の推薦 (お願い) (表彰委員会)	8
---	---

2020 (令和 2) 年度・2021 (令和 3) 年度植生学会学会賞, 奨励賞, 功労賞, 特別賞, 論文賞, 研究発表賞受賞記事 (表彰委員会)	
---	--

.....	9
-------	---

植生学会誌が新しくなりました (編集委員長)	15
------------------------	----

群集属性検討委員会からの報告 (群集属性検討委員長)	17
----------------------------	----

植生情報 編集担当からのお知らせ	18
------------------	----

植 生 情 報

「植生情報」は植生学会の情報誌です。学会員の交流、情報交換の場を提供するために年一回刊行が予定されています。植生学会の会員には無料で配布されます。購入希望の方は、植生学会の会員として登録されますようお願いいたします。学会入会に関しては、植生学会ホームページをご参照ください。

また、この情報誌では会員の皆様からの投稿を歓迎いたします。提言、話題紹介など原稿がありましたら、編集担当までお送りくださいますようお願いいたします。投稿の方法などにつきましては、18 ページの「植生情報編集担当からのお知らせ」をご覧ください。また、新刊や学会、企画展などの予定がありましたら情報をお寄せください。さらに、編集担当へのご意見・ご要望がございましたら遠慮なくお申し付けください。

本誌内容の著作権は植生学会に帰属します。ただし、著者による複写・複製は自由とさせていただきます。

植生学会第 27 回大会のご案内
<http://shokusei.jp/congress/SVS2022>

植生学会第 27 回大会は、2022 年 10 月にオンライン（主会場：東京農工大学）で開催します。フィールド研修は大会と分離して 9 月に実施することとなりました。多くの皆様のご参加をお待ちしています。なお、フィールド研修の翌日、植生学トレーニング・スクールが実施されます。

日程

- 2022 年 9 月 17 日（土）：フィールド研修（筑波大学 山岳科学センター八ヶ岳演習林ほか）
 2022 年 9 月 18 日（日）：植生学トレーニング・スクール（筑波大学山岳科学センター八ヶ岳演習林ほか）
 2022 年 10 月 22 日（土）：一般講演、総会、学会賞等授与式、懇親会（WEB 開催）

各種受付

大会受付・講演要旨担当	フィールド研修担当	大会実行委員会
http://shokusei.jp/congress/SVS2022/	植生学トレーニング・スクール担当	（大会全般に関する問い合わせ）
〒 780-8520	〒 305-8572	〒 183-8509
高知市曙町 2-5-1	つくば市天王台 1-1-1	府中市幸町 3-5-8
高知大学理工学部	筑波大学生命環境系	東京農工大学農学部
比嘉基紀	上條隆志	吉川正人
mhiga@kochi-u.ac.jp	kamijo.takashi.fw@u.tsukuba.ac.jp	masato@cc.tuat.ac.jp
電話：088-844-8310	電話：029-853-4704	電話：042-367-5741

参加・一般講演・フィールド研修の申し込み

- ・ウェブ上の申込フォーム（<http://shokusei.jp/congress/SVS2022/>）から申し込んでください。
- ・一般講演（口頭・ポスター）の申込締切は 8 月 19 日（金）、講演要旨の提出締切は 9 月 9 日（金）です。
- ・フィールド研修と植生学トレーニング・スクールの申込締切は、7 月 15 日（金）です。
- ・大会への参加申し込みは 10 月 7 日（金）まで受け付けますが、できるだけ 8 月 19 日（金）までのお申込みにご協力ください。8 月 19 日を過ぎて申し込んだ方は、参加者名簿に掲載されません。

参加費と支払方法

参加費は以下の通りです。申込フォームの送信とともに、所定の金額を下記の口座にお振込みください。

大会参加費	会員		非会員	
	8 月 19 日まで	10 月 7 日まで	8 月 19 日まで	10 月 7 日まで
一般	1,000 円	2,000 円	2,500 円	3,500 円
学生	無料	1,000 円	無料	1,000 円
フィールド研修参加費	7 月 15 日まで			
	一般		3,000 円	
学生		1,000 円		

- ・講演要旨集が不要の方は、振替票にご記入ください（参加費は変わりません）。

- ・大会に参加せず講演要旨集のみご希望の場合は以下のとおりです。
講演要旨集のみ (大会参加なし) : 1,000 円
- ・植生学トレーニング・スクールについては、参加費は徴収しません。
- ・参加費は同封の振替票 (払込取扱票) を使用し、以下の口座に振り込んでください。振替票は 1 人 1 枚ずつご利用ください (1 枚の振替票を複数人で共用しないでください)。振込手数料は各自ご負担ください。領収書は講演要旨集とともに郵送いたします。

振込先

口座記号番号 : 00150-0-450547 (口座番号は右詰)

加入者名 : 植生学会大会企画委員会

ゆうちょダイレクトの場合は、下記のとおりです。

銀行名 : ゆうちょ銀行 金融機関コード : 9900

店番 : 019 店名 : 〇一九店 (ゼロイチキューウ店)

預金種目 : 当座 口座番号 : 0450547

口座名義 : 植生学会大会企画委員会

- ・非会員で学生の方は、申し込みの際に学生証のコピーをメールに添付してお送りください。
- ・納入された諸経費は原則としてお返しできません。ご了承ください。

一般講演

本大会の講演形式は Zoom を用いたインターネットライブ配信による発表を予定しています。発表は演者 1 人につき 1 題とし、演者は植生学会会員に限ります。会員でない方が演者として発表を予定している場合は、講演申し込みの前に植生学会への入会手続きをしてください (<http://shokusei.jp/baser/contact/admission-and-withdrawal>)。

発表の形式、講演要旨の提出方法等、詳細は決まりしだい学会のホームページ等でお知らせいたします。

発表賞

一般講演に対する発表賞 (口頭・ポスター) の選考・授与を行う予定です。研究発表賞の応募要項は決まりしだい学会のホームページ等でお知らせいたします。

総会

会則第 3 章第 14 条の規定により「総会は、正会員と団体会員の総数の 5 分の 1 以上の出席によって成立し、出席者の過半数をもって議決する。ただし他の会員を代理とする書類を総会前日までに会長宛てに提出したものは開催要件の人数に含める。」こととなっております。大会には参加しない会員でも総会には出席できます (別途、総会オンライン会場へのリンクをご案内します) ので、総会への出席にご協力下さい。諸事情により、総会へ出席できない方は、ウェブ上のフォームより他の会員を代理人として委任状をご提出ください。

フィールド研修

筑波大学山岳科学センター八ヶ岳演習林、川上演習林を中心にフィールド研修を実施します。①冷温帯を代表するミズナラ林、ズミ・ハンノキ湿地林、中間湿原の種組成の特徴、②これら群落の乾湿傾度に沿った推移様式、③北東アジア要素の樹種として知られるヤエガワカンバの植生地理学的特徴、④天然生のサワラ林の生育立地と更新特性などについて、観察と研修担当者による現地解説より学びます。実施に際しては、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、人数制限を行いますので、上限人数に達した場合、希望されても参加できない場合がありますのでご了

承ください。宿泊施設については、学生の一部を対象として八ヶ岳演習林に優先的に宿泊できるようですが、それ以外の方はご自身で確保するようお願いいたします。集合場所、集合時刻など追加情報と詳細については植生学会ホームページで随時お知らせします。

植生学トレーニング・スクール

フィールド研修の翌日、八ヶ岳演習林、川上演習林において現地開催します。実施に際しては、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から人数制限を行います。上限人数に達した場合、希望されても参加できない場合がありますのでご了承ください。宿泊施設については、学生の一部を対象として八ヶ岳演習林に優先的に宿泊できるようですが、それ以外の方はご自身で確保するようお願いいたします。追加情報と詳細については植生学会ホームページで随時お知らせします。

大会実行委員会

委員長：吉川 正人

委員：設楽 拓人、鐵 慎太郎

大会支援委員会

委員長：上條 隆志

要旨担当：比嘉 基紀、設楽 拓人

受付担当：比嘉 基紀

会計担当：井田 秀行

プログラム担当：平吹 喜彦、黒田有寿茂、武生 雅明

フィールド研修担当：上條 隆志、川田 清和、清野 達之

トレーニングスクール担当：上條 隆志、島野 光司

意見

植物量と草食獣の密度の関係の説明について

高槻成紀

麻布大学いのちの博物館

島野氏による解説文

「植生情報」誌に島野氏による「植物体積指数を用いた動物の個体数の推定方とその解釈」という解説文が公表された(島野 2021)。私は動物と植物、特にシカ(ニホンジカ *Cervus nippon*)と植物群落の関係を研究してきたので、最近になって植物研究者が動物について言及する動きが出てきたことを歓迎したい。島野(2021)の解説ではカモシカ(ニホンカモシカ *Capricornus crispus*)の調査マニュアルの活用法がわからないという人もいるということから、その実際上の手順が詳しく紹介されている。その最後の部分に次のような記述がある。

(一部略)カモシカ個体数をエサとなる植物量で推測する例を示した。じつは今回の資料で、シカに関してはこの通りのやり方ではうまく行かない。「エサが多いところでシカが多い」という関係は見られず、「シカが多いところはエサとなる植物量が少なくなっている」という現象が生じているからで、これは説明変数をシカ、目的変数を植物体積指数として解釈することで把握できる。

これを読んで私は混乱した。私が理解する限り、カモシカの調査マニュアルではカモシカ生息地の林床植物の量を被度と高さの積によって体積を推定し、その量が多ければカモシカが多いという推定の仕方が書いてあるようだ。つまり生息地に植物が多ければカモシカがたくさんいるだろうという仮説を前提としている。だが、「シカではそれが使えない、なぜならシカが多いところでは植物が少なくなっているからだ」という島野氏の説明は、「生息地に植物が多ければ草食獣が多い」という前提は正しくないとしていることになる。その根拠の例として崎尾ほか(2013)を引用している。ということはカモシカでは植物量とカモシカ密度は対応関係があるが、シカではそれが無いとしているということであり、このことに私は混乱したのである。

「正解」と推定

話をわかりやすくするために、以下のようなことを仮定する。20 km²の森林にカモシカが15頭いるとする。これは神様にはわかるが我々にはわからないので、我々はなんとかそれを知ろうとする。そのために通常はセンサスをする。20 km²を網羅的に歩いて調べ尽くすことは通常できないから、一人が10 haをカバーして10人で100 ha(1 km²)、つまり全体面積の10%を抽出するというような調査が行われることが多い。これが糞の量によって置き換えられることもあるし、ドローンを用いるなどの新技術が使われることもあるだろう。とにかく抽出サンプリングして密度を出して面積換算して20 km²の頭数を推定する。ここで、調査地の半分10 km²は植物量が多く、そこには10頭いて、残りの半分は植物量が少なく、そこにはカモシカが5頭いるとする(図1)。調査では普通見落としがあるから実測の平均値は多い方で1頭/km²ではなく0.7頭/km²、少ない方で0.5頭/km²ではなく0.3頭/km²などという数字が得られることが多い。これらは正解ではないが、それでも植物量が多い方がカモシカ密度も高いことはいえるし、真の値にヒットはしなかったが、諸々の現実の事情を考えれば、まずまず満足できる結果とえるだろう。

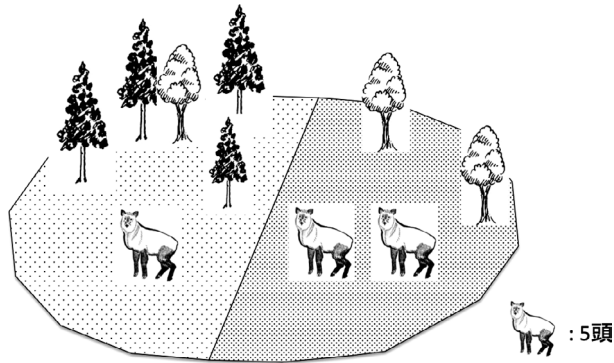


図 1 仮定的なカモシカの生息地と頭数. 土地は 20 km² と仮定.

10 カ所のサンプルがあるから、ばらつきも出せる.

島野氏の解説には私には理解の及ばない部分もあったが、それはただ私がこの種のことに明るくないからに過ぎない。誤解がないことを畏れるが、大きな考え方としては、植物量とカモシカ密度の関係についてのデータが蓄積され、一定の相関式が求められ、それを外挿すればある場所のカモシカの頭数が現地調査をしなくても植物量から推定できる。—この説明はこういう考え方で行われたものであろうと理解した。

カモシカの密度推定の問題点

このことについて私は、植物量とカモシカの密度との関係はそう単純ではないと考える。というのはカモシカの生息地にはササが生育していることがあり、特に多雪地ではチマキザサ *Sasa palmata* やチシマザサ *Sasa kurilensis* があることも多いからだ。そのため 2 つの問題が派生する。一つは、こういう大型のササが密生する場所ではカモシカの密度推定が困難であるという問題がある。もう一つは、実はカモシカはササをあまり食べないことがわかっていることだ。私たちは八ヶ岳のシカとカモシカが同所的に生息するところで両種の糞分析を行った (Kobayashi and Takatsuki, 2012)。生息地にはミヤコザサが密生していた。シカは食物供給量を反映して糞中にもササが多かったが、カモシカの糞にはササは少なく、牧草と双子葉植物が多かった。ササは消化率が低く、牧草や双子葉植物は消化率が高い。これはジャーマン・ベル原理と呼ばれる理論で説明される (例えば高槻 2020)。詳細は省略するが、要するに同じ反芻獣でも体重が 40 kg 程度しかないカモシカは良質の植物を選択的に食べるが、体重が 50-80 kg あるシカは消化力があるので「質より量」で、生息地に多いササを非選択的に採食する傾向があるからだと説明される。したがって植物量を横軸にとり、縦軸にカモシカ密度を示す式は、その中にササが入っていなければ右上がりになるであろうが、ササが右側にあれば、そこでのカモシカ密度は低くなるはずである。

シカでの仮定

さて、島野 (2021) の解説で私が混乱したのはこれがシカでは当てはまらないという記述があったからである。もしそうであるなら、なぜカモシカでは当てはまるといえるのだろうか。つまり、わかっている事実は何であり、その事実に基づいて何を知ることができるのか、あるいは知ろうとしているのかがわからなくなったのである。シカに当てはまらないことがわかっているのであれば、植物量と動物密度の関係式は何のためにあるのだろうか。

カモシカと同じようにシカでも植物量と密度の関係を仮定しよう。面積が 20 km² の島があり、面積の半分が草原で残りの半分が森林で、植物量は草原に多く、森林に少ないとする。シカは 150 頭おり、100 頭が草原、50 頭が森

林にいて、それぞれの密度は 10 頭/km²、5 頭/km² であるとする (図 2)。ここで同じようにセンサスをすると平均で草原が 8 頭/km²、森林が 2 頭/km² が発見され、推定頭数は 100 頭となるというような結果が得られることが多い。この結果から、シカは植物の多い草原に多く、森林には少なく、森林での発見率は低いなどが「わかった」とされる。

これは単純な島での仮定だが、そうでない場合は複雑である。シカの場合は草原と森林では明らかに草原で植物量が多くシカ密度も高いことが多いが、これは状況によって大きく違う。想定した島は私の調査地の金華山を参考にしたが、ここは狩猟が行われないのでシカは草原でものんびりと草を食べていることが多い。しかし狩猟や駆除が行われている場所では、シカは警戒心が強く、昼間は草原には出てこないことが多い。そのためセンサス結果では食物が多い草原でシカ密度が低くなる。この点については、糞量調査であれば草原が高密度という推定値が出るだろう。

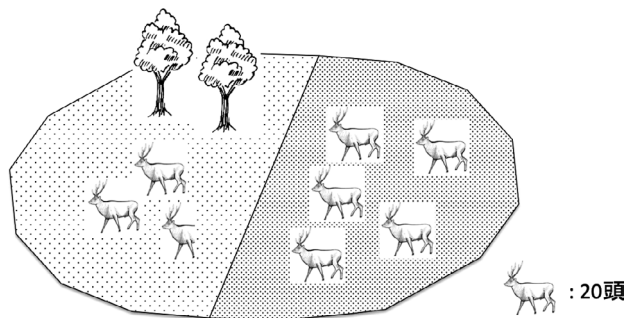


図 2 仮定的なシカの生息地と頭数。土地は 20 km² と仮定。

シカとカモシカの比較

カモシカとシカで面積、植物量、頭数などを仮定したが、シカの密度をカモシカの 10 倍ほどにした。これには理由がある。シカは基本的に数頭の群れ単位で生活し、しばしば群れを作り、一夫多妻の繁殖システムを持つ。そのため食物条件が良ければ非常に高密度になる。このことを考慮してシカの密度を一桁高くしたのである。しかし前述のように、草原にいるのは夜だけで、昼間は森林に潜んでいることが多い。その意味では植物量とシカ密度の関係は単純ではない。これに対してカモシカは単独性であり、他個体が近くにいるのを許容しない行動学的特性を持つからシカのように高密度にはならない。一頭一頭がスペースをとって生活するため、資源量だけで密度が決まるわけではないのである。もっとも、その行動学的な距離そのものが植物が乏しい場所では長くなるので、大きくいえば植物量とカモシカ密度は対応関係があるといえるかもしれない。またカモシカは一夫一妻のペアを形成するが、シカは一夫多妻の繁殖システムを持つため (例えば三浦 2020)、このことも密度と関係する。重要なのはシカとカモシカとでは密度を決める要因が違い、しかもシカの場合は、密度が狩猟や有害鳥獣駆除がおこなわれるか否かによって強く影響を受けるということである。

さらに言えば、シカの食性は経時的も変化する。高知県の三嶺山域では近年シカが急激に増えて植生が大きく変化した。特に標高 1160 m の調査地では 2000 年頃にはスズタケ *Sasa borealis* が密生していたが、2020 年にはほとんど消失した。この場所では 2010 年 8 月にシカの糞分析をしており、双子葉植物が 22.3%、ササが 22.5% を占めていたが、2020 年になると双子葉植物は 14.7% に減少し、ササは全く検出されなかった (高槻ほか 2021)。つまり、同じ場所でもシカは植生を変化させるからシカの食性も一定ではないということである。そうであれば、生息地の植物量とシカ密度の関係を捉えるのも一筋縄では行かなくなる。

モデルと生物情報

私たちは神様ではないから自然界で起きていることをそのまま知ることはできない。そのため、抽出調査などをしてそれに迫ろうとする。豊富なデータが集まり、適切なモデル（例えば回帰式）が採用されればその正解に接近できるはずである。モデルがあれば「答え」を出すことはできるが、少なくとも生態学的な研究においてはそのモデルにそれぞれの動物の生物学的な特性が的確に組み込まれなければ見当違いな結果になることがある。実際にはこの作業は容易ではない。この考察だけでも、シカとカモシカの消化生理、食性、体重、繁殖システム、狩猟の有無などが植体量と動物密度の関係に大きい影響を与えることがわかった。実際にはもっと複雑であろうし、それらの要因の複合効果も想定される。モデルがあって数字を入れれば解は出る。しかしそのモデルが適切であるか否かはつねに慎重に考慮され、改良される必要がある。適切なモデルを構築するためには地道な野外観察をする生態学者と優れたモデリストとの協力が欠かせないと思う。

摘要

島野 (2021) によるカモシカ生息地の植物体積指数とカモシカ密度との関係についての解説は、この関係式はカモシカでは成立するがシカでは成立しないとしている。筆者は動物によって異なる見解がありうることが理解できなかった。この関係についてはシカとカモシカの生物学的情報を的確に組み込む必要があり、その実現のためには動物各種の調査と優れたモデル構築の双方が不可欠であることを指摘した。

引用文献

- Kobayashi, K. & Takatsuki, S. 2012. A comparison of food habits of two sympatric ruminants of Mt. Yatsugatake, central Japan: sika deer and Japanese serow. *Acta Theriologica*, **57**: 343-349.
- 三浦慎悟 2020. 哺乳類の生物学 4 社会 新装版. 東京大学出版会, 東京.
- 崎尾 均・久保満佐子・川西基博・比嘉基紀. 2012. 秩父山地におけるニホンジカの採食が林床植生に与える影響. *日本緑化工学会誌*, **39**: 226-231.
- 島野光司 2021. 植物体積指数を用いた動物の個体数の推定ほうとその解釈: カモシカ保護管理マニュアルに則った調査で行われる植物調査の結果の活かし方. *植生情報*, **25**: 4-11.
- 高槻成紀 2020. 哺乳類の生物学 5 生態 新装版. 東京大学出版会, 東京.
- 高槻成紀・石川慎吾・比嘉基紀 2021. 四国三嶺山域のシカの食性—山地帯以上での変異に着目して. *日本生態学会誌*, **71**: 5-15.

2022 年度植生学会 学会賞, 奨励賞,
功労賞, 特別賞の推薦 (お願い)
植生学会 表彰委員会

植生学会では、植生学分野の研究、教育、啓発普及、および本会の運営等において特に顕著な成果・貢献をなされた会員を讃え、表彰を行って参りました。今年度も、植生学会表彰規定に基づき、以下 4 賞に対して推薦 (自薦・他薦) を募りますので、是非ご応募ください。

1. 賞の種類

- [学会賞] 本会に 5 年以上所属し、植生学に関する優れた研究業績によって、貴重な学術的貢献をなしたと認められる者。
- [奨励賞] 本会が発行した刊行物に優秀な論文を発表し、独創性と将来性をもって学術的貢献をなしたと認められる者。選考の対象者は 40 歳未満とし、過去に奨励賞の受賞経験のない者とする。
- [功労賞] 植生学に関する研究に加えて教育や啓発普及、および本会の運営等に長年にわたって力を尽くし、特に顕著な功績をなしたと認められる者。
- [特別賞] 植生学または本会の発展のために、多大な貢献をなしたと認められる個人あるいは団体。研究や教育への貢献のみならず、植生学の視点から環境保全事業や啓発普及活動等に取り組むような、社会貢献も評価の対象とする。

2. 推薦の方法・推薦書の取り扱い

植生学会ホームページ (<http://shokusei.jp/baser/>) の「学会賞」のバナーを開いて、推薦手続きを確認ください。記載いただく項目を示した「推薦書フォーマット」

も、学会賞、奨励賞、功労賞、特別賞のそれぞれで閲覧・ダウンロードできるように準備しております。

提出いただいた推薦書は、選考以外の目的には使用しません。また、選考手続き終了後、提出いただいた推薦書は破棄し、返却いたしません。あらかじめご了承ください。

問い合わせは、下記にお願いいたします (E-mail が確実です)。

3. 推薦書の締切日程

2022 年 8 月 15 日 (月) 発信日または消印有効

推薦書は表彰委員長まで、E-mail にファイル添付、または郵送にてご提出ください。

受領後ただちに、推薦書に記載された連絡先に「受領通知」をお届けします。万一、受領の連絡がない場合は、お問い合わせいただきますようお願い申し上げます。

4. 問い合わせ先・推薦書の送付先

〒 981-3193 宮城県仙台市泉区天神沢 2-1-1

東北学院大学 教養学部

平吹喜彦 (植生学会表彰委員長)

Tel : 022-773-3706

E-mail: yhira@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

2020 (令和 2) 年度・2021 (令和 3) 年度植生学会
学会賞, 奨励賞, 功労賞, 特別賞, 論文賞,
研究発表賞 受賞記事
植生学会 表彰委員会

2020 (令和 2) 年度
学会賞受賞者
中村幸人氏

中村幸人氏は植物社会学を専門とし、『日本植生誌』編纂の主要メンバーとして、日本の植生の網羅的な整理を進めるプロジェクトを担ってこられた。

独自の研究として、日本の亜高山帯から高山帯の植生を対象とした群落分類の体系化があり、特に高山帯では多くの新群集を記載するとともに、その組成的背景を植物分類地理学的な視点から考究してこられた。研究成果は、『横浜国立大学環境科学研究センター紀要』や『日本生態学会誌』、『植生学会誌』などに掲載された。

さらに活動の場を中国、台湾、ロシアへと拡げ、各国の植生研究者の育成を図りながら、東アジアの温帯以北の植生について、群落分類体系の確立とその地理的分布域の解明に尽力されている。研究成果は、『Phytocoenologia』や『Berichte der Reinhold-Tüxen-Gesellschaft』などに掲載された。

これら一連の研究により、東アジアの植生構造と、その中で日本の植生の位置づけに関する解明が進展したことは高く評価できる。

また、32 年間の大学教員生活において、300 名を超える学生の研究指導を行い、植生学の専門知識と技能をもって地域環境の保全に寄与する人材を育成した。2003 年からは、植生アドバイザー育成事業を手がけられ、植生の保全・復元に携わる技術者の育成に尽力されている。

学会会員歴は 24 年で、2020 年度より群落属性検討委員長、運営委員を務めている。

以上のように中村幸人氏は、植生学に関する優れた研究を重ね、顕著な学術的貢献をされた。植生学と植生学会への貢献は極めて大きく、学会賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

奨励賞受賞者
大津千晶氏

大津千晶氏は、山地帯・亜高山帯の草原を主なフィールドとして、精力的に研究活動を行ってきた。2011 年に『植生学会誌』に掲載された主筆論文では、その草原生態系に対するニホンジカの影響を把握することを目的に、秩父多摩甲斐地域および南アルプス地域で 1980 年代と 2008 年に実施した追跡調査の結果が詳細に解析され、論文賞を受賞している。さらにその後も、過去の草原面積が草原生植物の存続と移入に及ぼす影響や、草原生植物の保全における管理継続の重要性、防鹿柵設置後の草原生植物の回復を左右する要因などを、次々と明らかにしてきた。

また、生物多様性に配慮した緑化工指針の作成を目的とした研究も推進され、施工後の植生と立地環境、施工条件の関係について解析した。そして、法面の表面侵食の防止と在来種の侵入・定着の促進を両立させる手段として、植生工や種子配合の選択、獣害対策の実施による法面環境の整備が有効であることを指摘した。

一連の研究成果は、上述した 2011 年の『植生学会誌』のほかにも、『日本緑化工学会誌』、『Journal of Vegetation Science』、『Biodiversity and Conservation』、『PeerJ』といった国内外の学術雑誌に 7 編 (うち 4 編は主筆) の論文として公表された。

以上のように大津千晶氏は、植生学会が発行する刊行物を含む学術誌に優秀な論文を発表し、独創性と将来性をもって学術的な貢献をされた。奨励賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

功労賞受賞者
波田善夫氏

波田善夫氏は、1972 年に岡山理科大学理学部に就職され、2019 年に退職されるまで、副学長・学長も務められながら、研究と後進指導に貢献された。

波田氏の初期の研究対象は湿原植生で、後には湖沼・河川などの水に関係する植生の成立要因の解析や保護・保全、ビオトープ創出などに関する研究に取り組んだ。湿原の発達には周辺の森林植生が大きく関与していることから、さらに地質・地形と森林植生の関係を解析し、

ひいては地域植生の理解深化に寄与した。

また、植物社会学における組成表操作を省力化するために、パソコンを使った表操作ソフトの開発にも早くから取り組み、1989 年には「植物社会学的表操作プログラム VEGET」を公開した。

一連の研究成果は、『岡山県自然保護センター研究報告』や『岡山理科大学自然植物園研究報告』などで公表されるとともに、数多くの単行本として刊行された。代表的な著作に、『日本の植生図鑑 2 一人里・草原一』、『日本の植生 一侵略と攪乱の生態学一』、『生態学からみた身近な植物群落の保護』、『自然再生事業 一生物多様性の回復をめざして一』、『植物群落モニタリングのすすめ』などがある。

社会的にも、岡山県自然保護審議会委員や岡山県環境影響評価技術審査委員会委員などを務め、自然環境の保全に貢献した。

植生学会においては、学会設立時から運営委員を 3 期 9 年にわたって務め、また大会を 2007 年に岡山理科大学で開催する際には、大会会長を務めた。

以上のように波田善夫氏は、植生学に関する研究と教育、社会貢献、そして植生学会の運営に長年にわたって尽力され、顕著な貢献をされた。功労賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

福嶋 司氏

福嶋 司氏は植物社会学および植生管理学を専門とし、長年にわたって植生学の発展と人材育成に貢献された。

主要な研究業績には、植物社会学的な手法によるブナ林の群落体系の確立と湿原の保全管理に関する取り組みがある。前者に関しては、世界的なスケールでブナ林の種組成や分布、生態を比較し、日本の自然林の主要部をなすブナ林の植生地理的な特徴を明らかにするとともに、気候変動による分布予測モデル構築の土台を提供した。後者に関しては、日光の戦場ヶ原湿原や群馬県の玉原湿原をフィールドとして、人為によって劣化した湿原植生を保全・復元するための実践的な研究を行い、課題解決を推進した。これらの学術的貢献により、2007 年に植生学会賞を受賞した。

また、千葉大学と東京農工大学における 35 年間の教

員生活において、200 名を超える学生に研究指導を行い、植生学の専門知識と技能をもって自然と人間の共生に寄与する人材の育成に尽力した。在職中に編著者となって刊行した『植生管理学』や『図説 日本の植生』は、緑の保全を学ぶ学生の教科書としても広く活用されている。

さらに、環境行政の推進にも積極的に関わり、東京都海上公園審議会の会長をはじめ東京都自然環境審議会、東京都文化財保護審議会、林野庁保護林モニタリング検討委員会など多数の委員を歴任した。

植生学会においては、学会設立時に幹事長を 2 期 6 年、その後に運営委員を 2 期 6 年、会長を 2 期 6 年務められ、学会の運営・発展を担ってこられた。

以上のように福嶋 司氏は、植生学に関する研究と教育、社会貢献、そして植生学会の運営に長年にわたって尽力され、顕著な貢献をされた。功労賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

論文賞受賞者

齊藤みづほ・星野義延・吉川正人・星野順子氏

流積と集水域面積の関係からみた西表島の溪流辺植物群落の生態分布。植生学会誌、第 36 巻 第 1 号：17-31。

2019 年 6 月発行。

本論文では、溪流辺に生育する植物群落の種組成とその立地環境を説明するために、詳細な現地調査のデータを積み重ねた上で、著者ら自身が構築した流積と集水域面積による冠水指標をもとに解析がなされている。伝統的な植生学の知見をベースに、独自性の高い分析・研究を行い、溪流辺植物群落への理解を深め、さらにその保全に大きく寄与することも期待される点で高く評価できる。植生学会論文賞にふさわしい論文である。

以上のことから、植生学会運営委員会において論文賞受賞者と決定した。

研究発表賞

新型コロナウイルス感染拡大により、第 25 回大会は初めてのオンライン大会となった。審査・選考にかかわる不測の事態を避けるため、研究発表賞の募集を止むなく中止とした。

2021 (令和 3) 年度

学会賞受賞者

吉川正人氏

吉川正人氏の主な研究対象は河川植生で、特に土砂動態や河道特性に着目した植生の反応を解析して、植物群落の成立の解明にアプローチしてきた。

また、吉川氏は、人間による火入れなどの影響を受けた河川域やシカによる採食の影響を受けた植生などにも研究対象を拡げ、植生学に関わる基礎的・応用的な研究を展開している。一連の研究成果は、植生学会や国際植生学会などの大会で数多く発表され、また『植生学会誌』には論文賞受賞論文 3 編を含む 11 編が掲載され、『Ecological Research』や『Journal of Vegetation Science』などにも掲載論文がある。

さらに、吉川氏は、『植生管理学』や『図説 日本の植生』といった一般普及書の執筆を担当するとともに、植生学会の植生学トレーニングスクールの世話人を務めるなど、植生学の普及と若手の育成にも貢献している。

植生学会における活動としては、学会設立時から 26 年にわたる会員であり、2002 年以降は常に何らかの委員または事務局として学会運営に貢献している。これまでに運営委員を通算 4 期 12 年、庶務幹事を 2 期 6 年務めるとともに、将来計画委員会委員長を 1 期 2 年、群集属性検討委員会委員長を 1 期 3 年、編集委員長を 1 期 2 年 (在任中) 歴任している。第 13 回大会 (2008 年、東京農工大学) では、大会実行委員として開催準備・運営にあたっている。また、企画委員在任中には (2 期 6 年)、シカによる植生影響の全国調査や東日本大震災の津波による植生影響調査に取り組んだ実績がある。

以上のように吉川正人氏は、植生学に関する優れた研究を重ね、顕著な学術的貢献をされた。植生学と植生学会への貢献は極めて大きく、学会賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

奨励賞受賞者

設楽拓人氏

設楽拓人氏の主な研究テーマは、日本に隔離的に分布する氷期遺存樹種の分布変遷で、種分布モデルを活用して北東アジア大陸部と日本列島の氷期遺存樹種や森林植

生の変遷および気候的要因の解明に取り組んできた。

これまでの研究では、気候データを用いた種分布モデルの構築によって、ヤエガワカンバとチョウセンゴヨウの過去の潜在分布域を推定し、日本における現在の隔離的な分布の形成過程を再現することに成功している。また、国内で分布域の正確な情報がなかったチョウセンミネバリについて、分布予測モデルに基づいた生育地の探索を行い、モデルの予測精度を検証しつつ新産地を明らかにするとともに、植物社会学的な調査により生育する群落の組成的特徴を明らかにした。種分布モデルを導入したことによって、これまでは化石や花粉分析による断片的な情報から推測することしか出来なかった氷期遺存樹種の分布変遷に理論的裏付けを与えたことは、日本の植生研究に対する大きな貢献と言える。

また、設楽氏は植物相や種生態に関しても深い関心を持ち、特に島嶼におけるラン科等の菌従属栄養植物について、その形態変異や種子散布様式に関する研究に携わり、いくつかの新知見を報告してきた。

一連の研究成果は、『Vegetation Science』をはじめ、『Plant Ecology』、『Journal of Japanese Botany』、『植物地理・分類研究』といった国内外の学術雑誌に 13 編 (うち 6 編は主筆) の論文として公表された。

以上のように設楽拓人氏は、植生学会が発行する刊行物を含む学術誌に優秀な論文を発表し、独創性と将来性をもって学術的な貢献をされた。奨励賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

増井太樹氏

増井太樹氏は、暖温帯から冷温帯にかけての半自然草原を主なフィールドとし、研究活動と保全・再生に向けた実践的取り組みを行ってきた。

2020 年に『植生学会誌』に掲載された論文では、立地環境や植生の異なる東日本 4 地域の半自然草原を対象に火入れ後の地温測定を行い、その変動の特徴を明らかにすると共に、火入れが植生に及ぼす影響について検討した。本論文では、火入れ後数日から数ヶ月にわたる地温データが対照地のそれと共に示され、地温の日較差の継続期間や海外の調査地との変動パターンの違いが見出されている。その学術的意義、基礎的知見としての価

値は非常に高いと言える。

また増井氏は、半自然草原における植生変化や管理放棄に伴う種の欠落パターン、斜面崩壊地における草原植生の回復状況など、その保全・再生に資する研究成果を『日本緑化工学会誌』、『保全生態学研究』、『景観園芸研究』といった国内の学術雑誌・報告書など 8 編 (うち 4 編は主筆) で公表している。

これらの研究活動と並行して、増井氏はコンサルタント、大学院、市職員と様々な職務・経験を重ねながら、火入れの実践やその実施に係るアドバイス、茅材の利活用や製品化、人と自然の共生をテーマとした施設のコンセプト策定など、半自然草原の保全・再生に向けた多様かつ実践的な取り組みを、様々な主体との協働の下、各地で進めてきた。これらは草原生態系の維持・回復、さらには草原の継続的な利用管理と、その資源を生かした地域の活性化や持続可能性の向上に寄与するものであり、生物多様性保全に関わる社会的取り組みとして特筆に値すると言える。

以上のように増井太樹氏は、植生学会が発行する刊行物を含む学術誌に優秀な論文を発表し、独創性と将来性をもって学術的な貢献をされた。奨励賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

功労賞受賞者

石川慎吾氏

石川慎吾氏の主要な研究テーマとして、河畔植生の構造と動態、および四国山地の植生に及ぼすニホンジカの影響の 2 点が挙げられる。

河畔植生の構造と動態に関する研究は、石川氏が学生時代から取り組んできたテーマで、北海道、東北、四国などの主要河川において河畔植生を構成する植物群落の配列が明らかにされ、特にヤナギ科樹種が構築する河畔林の解明に大きく貢献した。さらに、砂礫堆上の植生において群落の経年変化をとらえ、立地環境の違いと遷移系列における各群落のつながりを区別して河畔植生の構造を明らかにした。長野県上高地の河畔林における長期モニタリングは、その象徴的取り組みである。これらの研究により、河畔植生の構造と動態に対する理解が大きく進展した。

四国山地の植生とニホンジカに関する研究では、主に剣山系で植生変化について調査を進めるとともに、シカ柵を設置しながら植生復元に向けての活動を行ってきた。植生保護柵によって消失を免れた植物は多数に及び、剣山系の植物の多様性の保全に大きく貢献した。

こうした石川氏の研究は、各種の学会誌に論文として掲載されているほか、書籍としても公表されている。『植生学会誌』には 5 編、『植生情報』に 4 編が掲載されており、多数の学会発表もなされた。共著者や筆頭著者の多くは高知大学理学部において指導した学生であり、長年にわたる教育活動によって植生関連の研究者や実務者を多数育成した。

そのほか、高知県の植物や植生の保全に関する各種委員を歴任し、長野県の上高地においても、上高地自然史研究会の一員として、河川管理や登山道管理に対する提言を行った。両地域の生物多様性保全、自然環境保全への貢献度は極めて大きいと言える。

植生学会においては、学会設立時から編集委員を 2 期 6 年務め、その後も運営委員を 3 期 9 年、編集委員長を 2 期 6 年、表彰委員を 1 期 3 年、表彰委員長を 1 期 3 年務めた。また、2 期 6 年にわたって学会長を務め、大会を 2000 年と 2015 年に高知大学で開催している。このように、設立当初から学会運営の根幹にかかわっておられ、植生学会の運営・発展を担ってこられた。

以上のように石川慎吾氏は、植生学に関する研究と教育、社会貢献、そして植生学会の運営に長年にわたって尽力され、顕著な貢献をされた。功労賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

野寄玲児氏

野寄玲児氏は、植生帯や広域的な群落体系などスケールの大きい視点で研究を推進する一方、ウンヌケのような希少種の生育環境や群落記載といったローカルな視点でも研究を重ね、マルチスケールで高いレベルの研究活動を展開してきた。主要業績の一つである「東日本における中間温帯性自然林の地理的分布とその森林帯的位置づけ」(『日本生態学会誌』, 1990 年) は多くの研究に引用され、植生学・生態学のその後の研究に大きな影響を与えた。

また、神戸女学院大学の教員として、キャンパス内緑地を利用した実践的な学生教育を行うとともに、地元小学校の体験学習やイベントを通じて地域の環境教育に長年携わってきた。関西自然保護機構では運営委員を務めるなど、植生の保全活動においても多大な貢献を重ねてきた。

このような多忙な研究、教育、啓発普及活動の傍ら、植生学会においては、運営委員を 3 期 9 年、編集委員長を 1 期 3 年、編集委員を 3 期 9 年、企画委員を 2 期 6 年、幹事と会計監事をそれぞれ 1 期 3 年と、長きにわたって多くの役職を務められ、その運営と発展に貢献された。特に、学会設立時からの会員として、黎明期において植生学会の屋台骨形成に尽力された野寄氏の貢献は計り知れないものがある。

以上のように野寄玲児氏は、植生学に関する研究と教育、社会貢献、そして植生学会の運営に長年にわたって尽力され、顕著な貢献をされた。功労賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

特別賞受賞者

田中徳久氏

田中徳久氏の専門は植物社会学で、神奈川県内の植物群落の現状把握を目的に、基礎的な植生データの蓄積を推進してきた。小田原市入生田吾性沢地区の森林群落、川崎市南部の植物群落、多摩川河口の干潟の植生配分、大和市、厚木市、綾瀬市などに関する多彩な報告がある。

また、レッドデータ種が含まれる植物群落の調査も積極的にを行い、神奈川県内のサツキ群落、カワラノギク群落、ツメレンゲ群落、カザグルマ群落、デンジソウ群落に関して報告している。

田中氏は、植生の基礎となる植物の分類や植物相の特徴を明らかにする研究にも取り組んできた。日本新産の外来種については、ハイキジムシロ、スベリヒユモドキ、ダイコクマメゲンバイナズナなどに関する研究成果を、『植物分類地理』、『植物地理・分類研究』、『植物研究雑誌』などに発表している。地域の植物相については、小田原市入生田吾性沢地区、熱海市岩戸山、丹沢大山、横浜市に関する報告がある。

このほか、博物館に集められた神奈川県産植物標本の

属性情報を利用した植物地理区分や分布類型などの解析は、新しい取り組みと言える。その成果として、神奈川県内の 111 メッシュの植物地理、横浜市各区の植物相、箱根における植物の分布類型、神奈川県における帰化植物の分布拡大といった知見が公表されている。

これらの集成としての『神奈川県植物誌 2018』において田中氏は、県内の博物館の協力を得て、分布図のためのデータベース構築と版下作製の中核的役割を担当した。また、『神奈川県レッドデータブック』の作成にあたって、重要な役割を果たしている。

博物館学芸員の本務は資料の収集、調査・研究、展示と普及活動である。田中氏は、展示活動では 2009 年度に「押し葉～古瀬義植物標本コレクション」、2018 年度に「植物誌をつくろう！～『神奈川県植物誌 2018』のできるまでとこれから」などの特別展を担当した。普及活動では親子を対象とした植物観察会を継続して実施している。博物館外でもやまと市民大学講座や伊東自然歴史案内人養成講座などの講師を務め、日本女子大学や横浜国立大学で博物館学の非常勤講師を務めている。

植生学会においては、学会設立時から 26 年にわたる会員で、多数の大会発表と『植生情報』への寄稿がある。また、企画委員を 2 期 6 年、編集委員を 2020 年から務めている。

以上のように田中徳久氏は、植生学に関する研究とともに啓発普及・環境保全活動に尽力され、顕著な貢献をされた。特別賞を受賞されるにふさわしい方であると植生学会運営委員会で決定した。

論文賞受賞者

矢口 瞳・星野義延氏

武蔵野台地のコナラ二次林における植物機能群による林床管理の影響評価の有効性。植生学会誌、第 37 巻 第 2 号：69-84。2020 年 12 月発行。

雑木林の植生管理については多くの研究があるが、本論文では植物種の機能群の変化という視点から、植生管理による種組成の反応を評価している。種組成を機能群として読み取ることで、植物相の差異にかかわらずその結果をより一般化することができ、保全や管理の手法・時期を検討する上で高い汎用性をもつことが期待でき

る。本論文は植生学の基礎にも応用にも貢献する新たな視点を提示しており、植生学会論文賞にふさわしい論文である。

以上のことから、植生学会運営委員会において論文賞受賞者と決定した。

研究発表賞

新型コロナウイルス感染拡大が続く中、第 25 回大会に続いてオンラインで開催された第 26 回大会では、研究発表賞の審査・選考を行い、以下の受賞者を決定した。

口頭発表賞受賞者

金子和広氏

高解像度の数値地形モデル DTM と現地植生判別による根室半島台地上湿原の植生と地形の関係検証(金子和広・富士田裕子・横地 穰・加藤ゆき恵・井上 京)

ポスター発表賞受賞者

水越かのん氏

海鳥による種子分散の観点から見た、小笠原諸島の海鳥巢に含まれる植物種子の種組成(水越かのん・上條隆志・川上和人)

植生学会誌が新しくなりました

吉川正人 (植生学会編集委員長)

会員の皆様がこの記事をお読みの頃には、植生学会誌 39 巻 1 号がお手元に届いていることと思います。ご覧になってお気づきのとおり、今年度から学会誌のサイズやレイアウトが変更になりました。刷新というほどではありませんが、少々模様替えとなります。それと同時に、昨年度に行われた投稿規程などの改定にともない、原稿種別や投稿方法についてもいくつかの変更が生じております。これらの変更の経緯と目的について、紙面をお借りして説明いたします。

ここ数年、植生学会誌への投稿数は着実に増えており、37 巻 (2020 年発行) には 11 報、38 巻 (2021 年発行) には 13 報もの原稿を掲載することができました。学会誌への論文掲載数は、会員の研究活動のバロメーターといえます。また、会員の研究成果公表の場を提供することは、学会のもっとも重要な機能のひとつですので、多くの原稿が掲載できたことは喜ばしいことです。しかし、一方でページ数の増加は刊行費の増加に直結しており、2021 年度は学会誌の刊行費が単年度の会費収入の 9 割程度まで上昇しています。会員数が頭打ちになっている状況下で今後も現在のような掲載数を維持していくには、何らかの対策が必要となってきました。

また、会員の皆様からは、原稿種別の解釈や投稿原稿の審査・編集のあり方について、さまざまなご意見をいただいております。そこで今期の編集委員会では、植生学会誌の持続的な刊行にむけて、投稿規程をはじめとする各種規程の改定や、学会誌の体裁の見直しなどを行ってきました。39 巻 1 号は、こうした見直しの結果を反映した最初の号となります。今号からの主な変更点は以下のとおりです。

学会誌の体裁変更

39 巻 1 号より、冊子の判型を A4 変形判から A4 判に変更しました。従来の冊子よりも縦が約 1.5cm 長くなっています。同時に、文字サイズをこれまでより 1 段階小さくすることで、1 ページに収録できる文字数を約

20% 増やすことができました。これまでのレイアウトに比べると少し窮屈な印象を受けるかもしれませんが、行間や余白は最大限に確保し、圧迫感を抑えるように努力しました。

植生学会誌では、組成表などデータ量が大きな表を掲載する必要性から、無料で印刷できるページ数の上限を原著で 14 ページ、短報で 6 ページと多めに設定しています。それでも多くの原稿がこの上限を超えており、とくに短報ではほとんどの原稿が 6 ページに収まりきらず、超過ページ料金をいただいているのが現状です。今回の体裁変更によって、ページ数の抑制による刊行費の節減が期待できるほか、無料ページ内で収録できる情報量が増えることで、著者にとっても超過料金の負担が軽減されるメリットがあると考えております。

さらに、学会誌の掲載内容としては、これまで巻末に掲載していた「学会記事」の掲載をとりやめ、学会ホームページに掲載することとしました。執筆要領など、論文投稿に必要な情報も学会ホームページをご覧ください。

原稿種別の整理

2021 年 10 月の投稿規程改定により、植生学会誌が扱う原稿の種別を「原著論文」「短報」「総説」「資料・事例報告」(「資料・報告」から名称変更)の 4 種に整理しました(投稿規程 3 項)。これまでは原稿種別に「解説・意見」や「書評」も含まれていましたが、これらは以前から植生情報へ掲載してきたため、植生学会誌の原稿種別からは削除しました。また、これまでは原著論文と短報、資料・報告との形式上の区別が不明瞭だったので、原稿の構成を変更しました。短報では摘要(英文原稿の場合は和文要約)をつけない、資料・事例報告では abstract, key words, 摘要(英文原稿の場合は和文要約)をつけないこととし、より簡潔な原稿として投稿していただけるようになりました(執筆要領 2, 3 項)。

表原稿のカメラレディ化

学会誌に掲載する表は、いただいた原稿を元に印刷所で版組をおこなっていましたが、今後は図の場合と同様に、そのまま印刷できる状態（カメラレディ原稿）での入稿をお願いいたします（執筆要領 15 項）。植生学会誌の原稿では、組成表など表の数が多くなりがちで、その版組に多大な費用が発生しています。表原稿を著者の責任で整えていただくことによって、刊行費の大きな節減につながります。また、著者にとっても、入稿原稿と同じ印刷結果が得られること、著者校正の手間を省けることなどのメリットがあります。これまでよりひと手間おかけすることになりますが、学会ホームページに掲載されている「表の作成例」を参照のうえ、カメラレディ原稿での入稿にご協力ください。

なお、本文を理解するために必要不可欠ではないが公開しておきたい付随的なデータは、J-Stage 上に電子付録として掲載することが可能です。この場合も、著者自身で PC 画面上での閲覧を想定したサイズで原稿を作成していただくこととなります。

別刷無料提供の廃止

これまで、掲載された論文の連絡先著者には、希望に

より別刷 50 部を無料で提供しておりましたが、今後は部数に関わらず有料とさせていただきます（執筆要領 22）。植生学会誌への掲載原稿は冊子体の刊行後ただちに J-Stage に掲載され、無料で閲覧および PDF ファイルのダウンロードができるようになっております。そのため、印刷した別刷を提供する必要性は薄れている判断しました。別刷が必要な場合は所定の料金でご購入いただくか、ご自身でプリントアウトして作成してください。

他にも細かな変更点がありますが、詳しくは投稿規程ならびに執筆要領をご確認ください。他学会では、学会誌への原稿掲載に投稿料や審査料を徴収するところも多くなっていますが、植生学会では可能な限り会員の経済的負担を増やすことなく、研究成果公表の機会を確保していきたいと考えております。今回の一連の変更は、会員サービスの維持と刊行費の節減を両立させつつ、学会誌の持続的な刊行をはかるためのものです。なにとぞご理解とご協力をいただけますと幸いです。新しくなった植生学会誌でも、会員の皆様の研究成果の投稿を心よりお待ちしております。

群集属性検討委員会からの報告

群集属性検討委員会では、群集単位の属性をわかりやすくして公表する取り組みを行っています。最初の試みとして、環境省の植生図凡例に利用された群集単位を対象に、環境省の環境要因に関するメッシュデータを利用して以下の属性を取り上げました。

また、群集の位置をわかりやすくするために、気候的要因下に成立する帯状植生と土地的要因下に成立する非帯状植生に分けて、バイオームとしました。帯状植生は気候帯で表わし、非帯状植生は森林（高木林・亜高木林・低木林）、多年生草原、一年生草原に分けたうえで、植生相観と成立環境を組み合わせた名称を群系として表しています。

バイオーム、群系、気候帯、土地的要因、環境因子、生活形、群綱、群目、群団、群集を頭に置き、群集単位は優占種と常在度が高く、しかもその群集を特徴づける種を常在種とし、それぞれ 6 種以内で記載しています。

群集の属性として、id, 地上合計面積, 年最高気温, 年最低気温, 年平均気温, 1~12 月の月別気温 (max) と月別気温 (min), WI (max), WI (min), WI (mean), CI (max), CI (min), CI (mean), 年降水量, 年積雪量 (max), 年積雪量 (min), 年積雪量 (mean), 傾斜 (max), 傾斜 (min), 傾斜 (mean), 傾斜 (median), 地形位置指数 (max), 地形位置指数 (min), 地形位置指数 (mean), 地形位置指数 (median), 地形起伏指数 (max), 地形起伏指数 (min), 地形起伏指数 (mean), 地形起伏指数 (median) を記載しています。

公表の仕方

植生学会ホームページに「日本の代表的な群集の属性」のようなフラッグを立ち上げ、会員がアクセスできるようにします。その際、会員からの植生調査の情報提供も受け入れ、環境省のメッシュデータを介して、新たな群集の属性の充実を図るようにしていきたいと思えます。

文責 委員長 中村幸人

植生情報編集担当からのお知らせ

植生情報への投稿について

植生情報では、会員の皆様から以下のようなトピックについての投稿をお待ちしております。

- ・ 解説, 意見 (各地の植生に関する話題, 研究手法や植生管理手法の紹介, 環境教育の事例や手法の紹介, 植生学に関する展望と提言など)
- ・ 誌上討論
- ・ 博士学位論文の紹介
- ・ 共同研究の呼びかけ
- ・ 出版物 (書評), 研究会, 募金活動, 博物館等での企画の紹介

植生情報誌では査読 (ピアレビュー) 制度は採っておりません。掲載の可否については植生学会編集委員会植生情報編集担当が判断します。また、必要に応じて著者に原稿の修正をお願いすることがあります。

投稿の方法

原稿の形式は「植生学会誌」の執筆要領を参照してください (特に引用文献)。ただし、「植生情報」は「植生学会誌」とは異なりますので、あまり厳密に準拠していただく必要はありません。

原稿送付にあたっては、編集事務効率化のため、電子メール、CD 等での投稿を歓迎します。電子メールの場合は、テキストファイル、または MS-Word で作成したファイルを添付してお送りください。郵送の場合は、文書ファイルの入った CD とプリントアウトした原稿をお送りください。写真などの原稿は JPEG 形式としてください。図表を本文中 (word ファイルなど) に貼り付けた場合も、別途画像や excel ファイルをお送りください。図表は原則として白黒印刷とし、編集担当が認めた場合はカラーとします。なお、カラーページ分の印刷費は著者負担をお願いする場合があります (1 ページにつき 1 万円程度)。

投稿原稿に関する別刷りは実費を負担していただきます。原稿等に「別刷り〇部希望」とお書き添えください。

原稿は随時受け付けますが、次号 (2023 年 5 月発行

予定) に掲載を希望される場合は 2022 年 12 月末までに原稿をお送りください。送付先は次のとおりです。

著作権

掲載された記事の著作権は植生学会に帰属します。記事の転載は学会の許可を受けてください。

オンラインでの記事公開について

植生学会沖縄大会での運営委員会における「植生情報のオンライン上での公開に関する申し合わせ」の決議 (2017 年 10 月 21 日制定, 2017 年 10 月 22 日施行) により、植生情報誌の全文を発行から 1 年後に、植生学会ホームページで公開します。なお、(1) 非公開期間の短縮が本会および公共の利益に資するもの、(2) 編集委員長が必要と認めたもの、については、運営委員会の承認を経て非公開期間を短縮する場合があります。

原稿送付・連絡先

〒 305-8687 茨城県つくば市松の里 1 番地
(国研) 森林研究・整備機構 森林総合研究所
野生動物研究領域 鳥獣生態研究室
大橋春香

E-Mail : harukaohashi@affrc.go.jp

電話 : 029-829-8259

植生情報誌へのご意見、ご提案、ご要望などもこちらにお寄せください。

表紙画

ボタニカルアーティスト 佐々木 啓子

2020年は、コロナ禍で遠出することができず、もっぱら近所の川辺や池で散策することが楽しみとなっていました。

身近なところでも自然に触れることができたことに感謝して、今回は、昨年見た中からお気に入り植物でまとめてみました。

植生情報 第26号 Vegetation Science News No. 26

編 集	植生学会編集委員会（情報誌担当 大橋春香, 加藤ゆき恵）
発 行	植生学会 〒108-0023 東京都港区芝浦2丁目14番13号 MCKビル2階 笹氣出版印刷株式会社 東京営業所内
発行日	2022年6月20日
印 刷	勝美印刷 株式会社